

聖書における「光」の概念

使徒パウロが理解した「光」の概念

ベレーシート

●今回(第六回)の「ヘブル・ミドゥラーシュ例会」は、これまでの例会とは異なり、「光」(「オール」 אור)についてのミドゥラーシュを共通テーマとして提案いたしました。「光」は今年の夏の「ヒナヤーフ・キャンプ」のテーマだったのですが、それは一回のキャンプで消化できるようなものでは決してなく、「御国の福音」の根元にふれるテーマであると確信したためです。

●昨日の礼拝で、神田満先生が、荒野で叫ぶ声であるバプテスマのヨハネのことについてイエシュアが語ったことば―「まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。・・・バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。」(マタイ 11:11~12)―を取り上げました。そして、この神様のご計画である「御国」を知るには、「求める」程度では得られません。「激しく攻める」ことで得られるものであることが分かりますと語られて、初めて私もこの箇所に記されているイエシュアのことばが意味していることに目が開かれました。そして、この「ヘブル・ミドゥラーシュ例会」は、まさに「**天の御国を激しく攻める者たち**」による例会でなければならないということをお知らせされた次第です。

●これまで私は、「御国の福音」、「キリストの花嫁」を鍵として聖書にある神のご計画の全体像を瞑想することを導かれてきました。そして今回取り上げようとしている「光」という鍵(概念)は、それらを統括する秘められた鍵のように思うのです。つまり、使徒パウロのいう「奥義」(「ミステリーオン」 μυστήριον)にふれる事柄です。もし「光」が神の隠された奥義としての概念をもっているとすれば、聖書全体にそれが流れているわけです。そうであれば、「光」についての聖書神学的考察が不可欠であるということになります。それらについて一つひとつ丁寧に検証しながら、「光」についての理解が神の御心を知る真の鍵となりうることを論証する必要があると考えました。その取り組みはまさに「天の御国を激しく攻める」ことであり、それを得ることにつながると信じます。

●旧約で使われている「光」(「オール」 אור)は 120 回。そのギリシア語訳である「フォース」(φῶς)は新約で 73 回。合わせても 200 回程度です。この語彙に注目することは、神のご計画を明確に意識するだけでなく、その語彙と結びつく他の様々な語彙と運動して、隠されている事柄がより明確になっていくように思うのです。「光」の概念についての切り口はいろいろあると思いますが、今回の私の切り口は、使徒パウロが経験した「天からの光」、その「光」を彼がどのように理解していたかという点です。これを知るためには、パウロの回心の出来事と、彼が諸教会に書き送った手紙の中から見出さなくてはなりません。その考察のプロセスとして、使徒の働きで三度も記されているパウロの回心の記事を最初に取り上げ、その「光」にふれた彼がどのように変えられたのか。そしてその「光」を彼がどのように理解したのか、という点を取り上げたいと思い

ます。

1. 突然、サウロを照らした「天からの光」

●使徒の働きに記されているパウロの回心の記事はそれぞれ微妙に異なってはいますが、三回(9:1～19、22:3～21、26:9～18)記されています。聖書には「三」という数字が数多く使われています。「三度」「三日目」、「三日間」など、また今回のように「三」という直接的な数として記されていないまでも、「あかし」の記事が三回も置かれているのは、「神による完全な取り扱いの確証」を意味しています。

●サウロ(=「シャーウール」 חַיִלֵּשׁ は「神を熱心に尋ね求める者」の意)、つまり、後の使徒パウロ(=「パウロス」 Παῦλος はラテン語で「小さい」の意)は、ダマスコへの途上で突然「天からの光」に照らされました。彼は地に倒れ、「サウロ、サウロ。なぜわたしを迫害するのか」という声を聞いたのでした。「主よ。あなたはどなたですか。」と尋ねると、「わたしはあなたが迫害しているイエスである。立ち上がって、町に入りなさい。そうすれば、あなたのしなければならぬことが告げられるはずです。」という主の声を聞いたのです。彼は「天からの光」によって目が見えなくなりました。三日間、暗闇の中で、また一切の飲食も絶って、彼は自分に起こった出来事を考え巡らしていたことと思います。そして三日目に、主から遣わされたアナニヤというクリスチャンが訪ねてきて、サウロの頭に手をおいて祈った時、彼の目からうるこのようなものが落ちて、目が見えるようになったのでした。

●「目が見えるようになった」というのは、単に肉体的な視力が回復したことだけを意味しません。彼が迫害してきたイエシュアこそ、キリスト(メシア)であるということ論証できるほどに、彼の霊の目が開かれたことを意味します。言い換えるなら、キリストにある神のご計画(みこころ、御旨、目的)のすべてが、彼のうちにおいて整理し直されたことを意味します。たとえ三日間でも、それは私たちの何十年分に相当する経験であったかもしれません。驚くべきことは、その三日間の経験がダマスコに住むユダヤ人たちをうるたえさせるほどであったということです。何が彼をそのように変えたのでしょうか。それは「天からの光」です。この「天からの光」が、神によってすでに定められている永遠のご計画を、彼のうちに理解させ、悟らせる「啓示の光」であったのです。

●サウロを照らした「天からの光」は「シャハイナ・グローリー」という特別な光で、文字通り、それは「太陽よりも明るく輝く光」です。その光を見たサウロと彼に同伴した者たちはみな地に倒れました。しかし、その光によって目が見えなくなり、しかもその光の中から主の声を聞いたのは、サウロただ一人でした。後に使徒パウロはこの光を「キリストの栄光にかかわる福音の光」だとし、『光が、やみの中から輝き出よ』と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださった」と述べています(Ⅱコリント 4:4, 6)。「福音の光」と「キリストの御顔にある神の栄光を知る知識」とは同義です。つまり、天からの光なしに福音を理解することはできないということです。ですから、「天からの光」は「悟りを与えて人を輝かす光」であり、神との生きたかかわりをもたらす「いのちの光」とも言えるのです。

2. パウロが理解した「光」

HEBREW MIDRASH No.6

●ここで注目したいことは、Ⅱコリントの4章6節で、パウロが創世記1章3節にあるみことばを解釈(ミドゥラーシュ)して、「『光が、やみの中から輝き出よ。』と言われた神」と表現していることです。パウロが聖書のみことばを引用するときは、決まって、当時すでに書かれていた七十人訳聖書からでした。彼はユダヤ教のすぐれたラビでもあったわけですから、当然、ヘブル語で書かれた聖書も知っていたはずで、そのヘブル語の創世記1章3節には以下のように記されています(老婆心ながら、ヘブル語は右から「ヴァッヨーメル・エローヒーム・イエヒー・オール・ヴァイエヒー・オール」と読みます)。

オール ヴァイエヒー オール イエヒー エローヒーム ヴァッヨーメル

וַיִּמְרֶ אֱלֹהִים יְהִי אוֹר וַיְהִי אוֹר

光があった すると 「光あれ」 神は 言われた そのとき

七十人訳(LXX)では(左から右へ)

カイ エイベン ホ セオス グネーセートオー フォース カイ エゲネト フォース

καὶ εἶπεν ὁ θεός γενηθήτω φῶς καὶ ἐγένετο φῶς

And said God Let there be light and there was light.

新改訳第二版

そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。

新改訳改訂3版

神は仰せられた。「光があれ。」すると光があった。

●新改訳第二版の訳をここに記したのは、改訂3版で変更されているからです。変更された部分はどこでしょうか。かなりの部分が変更されているのが分かります。第二版の「光よ。あれ。」が、改訂3版では「光があれ。」となり、第二版の「すると光ができた」という表現が、改訂3版では「すると光があった」と変更されています。特に、第二版の「すると光ができた」という訳は、光が神によって創造されたことを感じさせます。ところが、改訂3版では、「できた」が「あった」に改変されたのです。口語訳も新共同訳も「あった」と訳していますが、何が問題なのでしょうか。ちなみに、NKJVでは there was、TEVは light appeared とあり、「光が現われた」と訳しています。

●ところでこの箇所を、Ⅱコリント4章6節で、使徒パウロは以下のように解釈して記しているのです。

ホティ ホ セオス ホ エイポーン エク スコトウス フォース ラムプセイ

ὅτι ὁ θεὸς ὁ εἰπὼν, Ἐκ σκοτῶν φῶς λάμπει,

というのは 神は 言われたところの 「やみから 光が 輝き出よ」

(やみの中から)

●パウロは、創世記1章3節のみことばをそのままではなく、その箇所を解釈して語っているのです。つまり、「やみの中から 光が輝き出よ」の「**やみの中から**」という部分が重要な点なのです。つまり、すでにあった

光を、やみの中から呼び出しているということです。これは神が命令することによって、そのときはじめて光が創造されたのではないことを意味しているのです。私は長い間、神が「光よ。あれ」と命じて最初に創造されたものが「光」だと考えていましたが、そうではないということに気づきました。自分の「理解の型紙」が破れるというのはこういうことなのです。**ただし**、です!! 本来、存在していた光、および他の被造物が「天と地」という歴史の舞台上に登場したとしても、聖書はその登場を「創造した」(「バーラー」**בָּרָא**)としているのです。これが神にのみ使われる動詞「バーラー」の秘密です。神の創造は決して「無からの創造」ではないと言えるのです。本来あったものを神はやみから輝き出るように呼び出したとしても、歴史の舞台では、「創造した」となるのです。

●このことをヘブル語の文法から説明したいと思います。

「イエヒー・オール」(**אֱלֹהִים יְהוָה**)の「イエヒー」は、「ハーヤー」(**הִיָּה**)の未完了形の指示形3人称男性単数です。「ハーヤー」の本来の未完了形は「イエフイエ」(**הִיָּה־יְהוָה**)となりますが、「イエヒー」(**יְהוָה**)と短縮形になっていることが「指示形」であることの証拠です。つまり、「あれ」という命令形ではなく、「そうあるように」と指示しているのです。「光よ。あれ。」という訳が、「光があれ」と改訂されているのはそうした含みがあると思われませんが、日本語の訳語は「命令」も「指示」も同じく感じられてしまいます。しかし、実はニュアンスが異なるのだということを知っておくことが、この箇所を理解する上でとても重要です。ちなみに、「ヴァイエヒー・オール」(**אֱלֹהִים יְהוָה**)の「ヴァイエヒー」はヴァヴ継続法(接続詞+未完了形)で、神が「指示した通りになった」という完了形の意味です。

●「光」が無から創造されたのではないということになれば、その「光」はそれまでどこにあったのでしょうか。答えは、「やみの中」です。「やみ」はヘブル語で「ホーシェフ」(**חֹשֶׁךְ**)と言い、私たちの知らない神の「秘密の場所」を意味します。このように理解することで、「光」の持つ概念がはじめて理解できるようになるのです。「やみから、やみの中から輝き出る光」、これが創世記1章3節の「光」です。

3. パウロの「光」の概念の諸相

●では、創世記1章3節にある「光」とはいったい何なのでしょう。その光が私たちの目に見える形でこの地上で現わされるときには、その光のことを特別に(ヘブル語と英語の合成語である)「シャハイナ・グローリー」と言います。あるユダヤ人のラビによって名づけられた表現のようです。しかし、聖書の中で神の特別な光に照らされて、その中から神(あるいは御使い)の声が語られる場合、それが「シャハイナ・グローリー」なのだ理解することができます。この「シャハイナ・グローリー」を初めて見た人物はおそらくモーセであったと思われます(出 3:2~6)。パウロが経験した「天からの光」も、まさに「シャハイナ・グローリー」なのです。しかしその「光」は普通には目には見えないものなのです。

●創世記におけるすべての被造物はこの「光」の中で造られています。その創造の最終の目的は、創造の冠としての「人」と神とのかかわりです。他の被造物である「天と地」は、神と人のかかわりとなる舞台を形成し

ています。創世記 1 章では「人」の創造がすでに「男と女」に創造されており、その「人」に与えられた特権についても記されていますが、2 章では「人(男と女)」の創造の意図とその創造のプロセスと秩序が、神の奥義を表わす事柄として、別の視点から扱われています。ちなみに、創世記において「光」(「オール」)という語彙は 1 章に 6 回しか出てきませんが、いずれも、本来あった「光」と「やみ」が明確に区別され、それを神は「よしとされた」ということが強調されています。

●ただし、この「光」は光源としての光ではなく、創造者である神とすべての被造物とのかかわりにおける「神のご計画としての光」でした。この神のご計画に基づいて人が神のかたちに似せて造られたのですが、人間は神に対して罪を犯したことによって、神の「光」を見失い、闇(の支配)の中に閉じ込められていました。しかし今や私たちは、キリストを通して、闇から光へ、サタンの支配から神の支配への中に移されるという福音の中に招かれ、生かされているのです。すべて主にある者たちは、例外なく、「天からの光」に照らされることなしには生きることはできません。神に敵対していたサウロ(後のパウロ)も、この「太陽よりも明るく輝く光」(使徒 26:13)に照らされたことで初めて不変の真理(=奥義)に目が開かれたのです。

(1) パウロのいう「奥義」(「ミステリオン」μυστήριον)と「光」の関連性

●パウロは余すところなく「御国」について語ることでできた人ですが、その「御国」は「隠されてきた奥義」なのです。「奥義」とは「隠されている事柄」を意味する言葉ですが、この言葉が新約で最初に登場するのは、マタイの福音書 13 章 11 節です。共観福音書(マタイ、マルコ、ルカ)はいずれも同じ話の箇所です。「御国の奥義」ということばを使っています(マルコとルカは「神の御国の奥義」としてはいますが、マタイは「神」を「天」に置き換えて「天の御国の奥義」としてはいます)。イエシュアが大ぜいの群衆に対して語った時に、それはたとえで語られました。すると弟子たちがイエシュアに「なぜ、彼らにたとえでお話になったのですか。」と尋ねました。これは「思いの外、先生がたとえで語ってくれたおかげで、とてもわかりやすい話で良かったですよ」という意味ではありません。むしろ、「たとえ話では、言わんとすることが群衆にはよく伝わらなかったのでは?」と言わんとしたのだと思います。そこでイエシュアは弟子たちに向かってこう言われました。「あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには赦されていません。」と。なんと不思議な答えでしょう。あたかもイエシュアが語るたとえ話の目的は、永遠の昔から天の御国の奥義を知ることが許されている者と、そうでない者とを区別するためだということです。なぜなら、「わたしがたとえで話すのは、彼らが見てはいるが見ず、聞いてはいるが、また、悟ることもしないからです。」と言い方で、区別がなされることを語ったのです。その区別とは、真に見るべきものを見ようとせず、また、真に聞くべきことを聞こうとせず、悟るべきことを悟ろうとしないことが明らかにされることであり、そのために「たとえ話」で語っているということをイエシュアは弟子たちに教えられたのです。ここで、「見るべきもの」「聞くべきこと」「悟るべきこと」とは、実は、「光」の事柄なのです。

●「奥義」ということばは新約聖書では 28 回使われていますが、そのうちの 21 回はすべて使徒パウロが使っています。彼の言う「奥義」とは「御国」(あるいは「御国の福音」)のことであり、それは「やみの中から輝き出た光」のことなのです。その「光」のことを説明するのに、パウロはいろいろな語彙によって言い換え

HEBREW MIDRASH No.6

ているのを彼の手紙によって知ることができます。

●ユダヤ人の修辞法として、ある一つの言葉を別のことばに言い換えて表現するという「パラレリズム」(並行法)というのがあります。詩篇の中にこのパラレリズムがあることが発見され、その重要性に気づいたのは、18世紀半ばになってからのことだと言われます。しかもこの「パラレリズム」は単なる文節だけに見られる文体の域を越えて、旧約思想の本質を提示するための不可欠な修辞法だということなのです。旧約のみならず、新約聖書にあるユダヤ人が書いた福音書、そして手紙の中にも、その修辞法が用いられているのですが、特に、使徒パウロの手紙はそれが顕著です。先ほどの創世記 1 章 3 節の「ゲネーセートオー・フォース」(光あれ)を「エク・スコトゥース・フォース・ラムプセイ」(やみから光が輝き出よ)と言い換えていることにもそれがうかがえます。使徒パウロはこの「言い換え」(パラレリズム)の達人とも言えます。この修辞法は事柄の本質をよく理解した者でなければできない技法なのです。

●さて、使徒パウロが「光」の概念をどのように言い換えているのかを考えてみたいと思います。このことを知るために、ここではエペソ人への手紙の 1 章 1~14 節をテキストとしたいと思います。このテキストにはパウロが神の栄光をほめたたえる賛美の源泉について極めて簡潔に記された驚くべき箇所、主にある「成熟した者」たち向けのテキストだと言えます。

【新改訳改訂第3版】エペソ人への手紙 1 章 1~14 節

- ① †のある箇所は第3版で改訂された部分です。()内は私の説明です。
- ② この手紙にある「**聖徒たち**」「**私たち**」「**あなたがた**」とは、「教会」(=キリストの花嫁)と同義です。
- ③ **黄色のマーカー**は、神の永遠のご計画と意志決定を表わす語彙で、「**みこころ**」「**みむね**」「**ご計画**」「**目的**」といった語彙が含まれます。これを読まれる方がそれらの語彙を自分でも調べられるように原語表記してあります。

1 神の**みこころ**(「セレーマ」 $\theta\acute{\epsilon}\lambda\eta\mu\alpha$)による**キリスト・イエス**の使徒パウロから、**キリスト・イエス**にある忠実なエペソの聖徒たちへ。

2 私たちの父なる神と**主イエス・キリスト**から、恵みと平安が**あなたがた**の上にありますように。

† 3 私たちの**主イエス・キリスト**の父なる神がほめたたえられますように。神は**キリスト**にあって、天にあるすべての霊的祝福(=予め定められた神のご計画とそれに付随する祝福)をもって私たちを祝福してくださいました。

† 4 すなわち、神は私たちを**世界の基の置かれる前から**彼にあって**選び**、御前で聖く、傷のない者にしようとされました。

† 5 神は、**みむね**(「ユードキア」 $e\acute{\upsilon}\delta o\kappa\acute{\iota}\alpha$)と**みこころ**(「セレーマ」 $\theta\acute{\epsilon}\lambda\eta\mu\alpha$)のままに、私たちを**イエス・キリスト**によってご自分の子(=「養子」、しかし花嫁であれば父から見て子の立場にある)にしようと、愛をもって**あらかじめ**定められました。

† 6 それは、神が**その愛する方**にあって私たちに与えてくださった恵みの栄光が、ほめたたえられるためです。

- +7 この方において私たちは、その血による贖い、罪の赦しを受けています。これは神の豊かな恵みによることです。
- +8 この恵みを、神は私たちの上にあふれさせ、あらゆる知恵と思慮深さをもって、
- +9 **みこころ**の奥義を私たちに知らせてくださいました。それは、この方において神があらかじめお立てになった**みむね**によることであり、
- +10 時がついに満ちて、実現します。いっさいのものが**キリスト**において、天にあるもの地にあるものがこの方において、一つに集められるのです。
- +11 この方において私たちは御国を受け継ぐ者ともなりました。**みこころ**により**ご計画**(「プロセス」*πρόθεσις*)のままをみな行う方の**目的**(=意志「ブーレー」*βουλή*)に従って、私たちはあらかじめこのように定められていたのです。
- +12 それは、前から**キリスト**に望みを置いていた私たちが、神の栄光をほめたたえるためです。
- +13 この方においてあなたがたもまた、真理のことば、あなたがたの救いの福音を聞き、またそれを信じたことにより、約束の聖霊をもって証印を押されました。
- +14 聖霊は私たちが御国を受け継ぐこと(=相続財産)の保証(=手付金)です。これは神の民の贖いのためであり、神の栄光がほめたたえられるためです。

●このテキストの中で重要なことばは多くありますが、その中で最も重要なのは、「**あらかじめ定められていた**」というフレーズです。何が「あらかじめ定められていたのか」と言えば、それは神の「みこころ」として、神の「みむね」として、神の「ご計画」として、神の「目的」として定められていた「隠された奥義」のことなのです。そしてその奥義としての内容は、神が御子キリストによって、キリストを通して、キリストのためになそうとしている定めている事柄、これが「光」の概念なのです。エペソ書1章のこのテキストには「光」という語彙は一度も使われていませんが、言い換えられた表現で「キリストの栄光にかかわる福音」、つまり、創世記1章3節の「光」について語っているのです。パウロの「あますところなく語ってきた御国の福音」とは、この「光」についての注解とも言えるのです。



(2) 使徒パウロのいう「神の知恵」と「光」の関連性

●「光」についての言い換えを、使徒パウロは「神の知恵」ということばを使って説明しているテキストを見たいと思います。そのテキストはコリント人への手紙2章です。そこある「この世の知恵」と「神の知恵」が明確に区別されている点に注目したいと思います。それは「やみ」と「光」が区別されていることの言い換えでもあるのです。

【新改訳改訂第3版】 I コリント2章4～10節

4 そして、私のことばと私の宣教とは、説得力のある知恵(=この世の知恵)のことばによって行われたもので

HEBREW MIDRASH No.6

はなく、御霊と御力の現れでした。

- 5 それは、あなたがたの持つ信仰が、人間の知恵にささえられず、神の力にささえられるためでした。
- 6 しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。
- 7 私たちの語るのは、**隠された奥義としての神の知恵**であって、それは、神が、私たちの栄光のために、**世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。**
- 8 この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。
- 9 まさしく、聖書に書いてあるとおりです。「目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」
- 10 神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。

●この箇所に出てくる「知恵」はすべて「ソフィア」(σοφία)というギリシア語です。ことばが同じであったとしても、「この世の知恵」と「神の知恵」があり、それらは「信者と不信者」「正義と不法」「光と暗やみ」「主の宮と偶像」という表現で言い換えられますが、重要なことは、対となっている両者にはどんなつながりも、どんな交わりも、何の一致もなく、全く異質なものだとしていることです。パウロは「この世の知恵」と「神の知恵」がそれとなく分かるように、形容詞をつけてその違いを示そうとしています。

(1) 「この世の知恵」

- ①「説得力のある知恵」
- ②「支配者たちの知恵」

(2) 「神の知恵」

- ①「成人(=成熟した者たち)の間で語られる知恵」
- ②「隠された奥義としての知恵」
- ③「御霊によって啓示された知恵」
- ④「神世界の始まる前から、あらかじめ定められた知恵」

●「神の知恵」は、この世の支配者たちにはだれひとりとして悟ることができません。「神の知恵」がこの世に存在していてもそれを「悟る」ことができないのです。**「神の知恵」と「光」とは、聖書においては同義語です。**その証拠に、それはいずれも隠されているからです。

●また、「神の知恵」は御霊によって啓示されなければ悟ることはできません。御霊の啓示を受けるためには、イエシュアを神の子として、そして、神が約束されたメシアであることを受け入れなければなりません。それまでは「神の知恵」はだれの目にも隠されているのです。パウロも「天からの光」にあずかるまでは、この「神の知恵」について知り得ませんでした。しかし霊の目が開かれてからは、「隠された奥義」を悟ることができたのです。それまで彼のうちに蓄えられた数多くの聖書の知識のピースが、今やそれが組み合わされて、神のご計画の全体像(神のみこころ、神の御旨、神の目的)が一つの絵のように見え始めたのです。奥義としての神のご計画の全貌を知ることこそ、神を知ることです。

HEBREW MIDRASH No.6

●使徒パウロという人は、「天からの光」を受けた後に、彼がそれまで受け、蓄えてきた知識が、天からの知恵によっていままでにないつながりを感じ取りました。それまで断片的であった知識が論理的に結びつき、自分が迫害してきたイエシュアこそメシアであることを論証できる力を得たのです。その力は多くのユダヤ人たちを「うるたえさせた」のです。使徒の働き 9 章 22 節には「イエスがキリストであることを証明して」とあります。「イエスがキリストであることを証明する力、論証する力」がパウロに与えられ続けましたが、この「証明する、論証する」という動詞の原語がギリシア語の「スึมビバゾー」(συμβιβάζω)で、以下のようないくつかの意味合いがあります。

- ① 組み合わせ、結び合わす(エペソ 4:16、コロサイ 2:2、コロサイ 2:19)
- ② 比較する、比較して結論を出す、確信する(使徒 16:10) concluding
- ③ 論証する、調べて結論を出す(使徒 9:22) to demonstrate
- ④ 教える、指図する(使徒 19:33、I コリント 2:16) to teach, instruct

●I コリント 2 章 4 節で「私のことばと私の宣教とは、御霊と御力の現れでした」と述べていますが、「御霊と御力」とは上記のこのことを意味しています。つまり、パウロのいう「御霊と御力の現れ」とは、イエシュアがメシアであることを聖書から確信し、イエシュアのことばや行為のすべてが神のご計画全体と何らかのかかわりをもっていることを比較し、結び合わせ、論証して、確信を引き出す特別な能力の現れのことだったのです。それは時代精神を用いた論証ではなく、聖書の「光」そのものについての論証をパウロは真っ向から語ったのです。それを語ることは、イエシュウのたとえ話がそうであつたように、それを悟る者とそうでない者とを明確に区別することでもあるのです。その区別は神の領域として私たちは神にゆだねるしかありません。

ベアハリート

●今回の共通テーマである「聖書における光の概念」について、私は使徒パウロが理解した「光」について取り上げました。この「光」の概念をこれからも聖書の多くの箇所を通して、また、さまざまな切り口を通して、確認されると同時に、新たな意味を探り出す必要があります。今回の「ヘブル・ミドゥラーシュ」を通して、使徒パウロが理解した「光」についての概念、つまり、「奥義」(御国の奥義)、「あらかじめ定められていたキリストにある神の御心、御旨、ご計画、目的」、そして「神の知恵」、そのすべてが「光」(「オール」אוֹר)の言い換えであることを理解することができました。

●使徒パウロは「あなたがたは、以前は暗やみでしたが、今は、主にあって、光となりました。光の子どもらしく歩みなさい。」(エペソ 5 章 8 節)と語っています。ここでの「光の子ども」とは、「明るく、元気で、生き生き」という意味ではありません。「光の子ども」とは、やみの中から輝き出された神の永遠のご計画を悟った者のことです。私たちは主にある「光の子」であることを自覚し、それにふさわしく歩み、パウロのように「光」についてあかしする力が与えられそれを伝えなければなりません。今も、「光はやみの中に輝いている」(ヨハネ 1:6)からです。それは、御国の奥義を知ることによって、人々の目を開いて、暗やみから光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、イエシュアを信じる信仰によって、御国を受け継がせるためです。

2015.10.26 銘形 秀則